

日本漢音資料に見られる全濁声母字の濁音形

佐々木 勇

一、問題の所在

わが国の漢音・呉音と、中国中古音との対応の原則は、従来の研究によってほぼ正確に捉えられて来ている。しかし、現存する古訓点資料をひもとく折に、その対応の原則に合致しない例に、我々はしばしば接する。

本稿では、その様な例の中で、日本漢音の頭音に注目したい。

日本漢音の頭音は、中国中古音の声母と左のような原則で対応する。

《原則》(1)有声音となるもの——清濁声母字・影母字

(2)無声音となるもの——全濁声母字・次清声母字・清声母字（除影母字）

いま、この内の(2)に問題を絞る。日本漢音では、中国原音の全濁声母字・次清声母字・影母字を除く清声母字は、無声音となるのが原則である。しかし、濁声点加点例を持つ現存の日本漢音資料中には、(2)の声母字に濁声点が加点された例が見られる。そして、それは全濁声母字に目立つのである。

中国中古音の全濁声母字が漢音では概ね清音で現れる中で、僅かながら存在する濁音形の有りさまを伝存する訓点

資料によってとらえ、その具体例に基づいて存在理由を考えようとするのが本稿の目的である。

二、全濁声母字への濁声点加点例

まず、漢音資料における濁声点加点の実例を分析することによって、その出自を明らかにしたい。

Ⅰ 院政期以前

問題の性格上、漢音資料中で濁音を区別しようとした初期の資料が要求される。しかし、漢音資料中に日本漢音で濁ることを示す濁声点を加点するようになるのは平安後期以降であり、それ以上は遡れない。しかも、院政時代に入っても、資料によっては清濁を区別しないため、対象資料は限られてしまう。

その様な状況下で、平安後期から院政期の加点資料から得られた用例を、左に分類して掲げてみる。⁽²⁾

(一) 漢籍

A 字音直読資料

① 長承本『蒙求』長承三年(一二三四)点

匡クハヤウ衡ヘイ(9)〈衡—匡母〉、二フ鮑ボウ(192)〈鮑—並母〉、墮ダ慎シン(460)〈墮—定母〉、尚シヤウ鵠コク(96)〈鵠—群母〉、章シヤウ拒コ(398)〈拒—

群母〉

B 訓読資料

② 『白氏文集』卷三・四天永四年(一二二三)点

堂々(三69)〈堂—定母〉

③天理図書館蔵『弘決外典鈔』院政初期点

(二)公典

随国(31注)〈随—邪母〉。管署(55注)〈署—禪母〉。相慶賀ス(74注)〈賀—匣母〉。重墮(75注)〈墮—定母〉

A 字音直読資料

④『不動念誦次第』長暦元年(一〇三七)点

一切具三身(26)〈具—群母〉。尽罪(34)〈尽—從母〉

B 訓読資料

⑤東京大学国語研究室蔵『惠果和上之碑文』平安後期点

髻亂の(10)〈亂—匣母〉。代宗(14)〈代—定母〉。炙𦵏𦵏の(21)〈𦵏—匣母〉

⑥高山寺蔵『惠果和上之碑文』平安後期点

誕(7)〈定母〉。寂ヲ(53)〈從母〉

⑦『金剛般若經集驗記』天永四年(一一二三)点⁽³⁾

邛局龍反尚行琮常(18ウ)〈尚—禪母・行—匣母〉。姑藏(59ウ)〈藏—從母〉。夏后(62才)〈夏—匣母〉

⑧『大慈恩寺三藏法師伝』卷第三 天治三年(一二二六)点

誅伐セラレテ(223)〈伐—奉母〉。鴻業を(289)〈鴻—匣母〉

⑨圖書寮本『文鏡秘府論』保延四年(一一三八)点

字対(東4)〈字—從母〉。実々(東5)〈神母〉

⑧ 天理図書館蔵『大慈恩寺三藏法師伝』巻第一 院政中期点

倭^{ヤマト}城^{シロ}(31)〈城―禅母〉

⑨ 東大寺図書館蔵『新修往生伝』巻下 保元三年(一一五八)点⁽⁴⁾

鎧^{ヨロイ}(10オ)〈鎧―匣母〉。誕^{タマヒ}節^{セツ}ニ(19ウ)〈誕―定母〉

右には、撥音尾字に続いたための連濁と考えられる例も含まれるが、それ以外のものも比較的多く存する。また、特定の声母に濁音形が見られるという傾向も伺えない。

このような、漢音資料における全濁声母字の濁音形の存在理由については、次の二つが考えられる。

A 日本漢音の母胎音が、全濁声母字の無声化を完了させていないものであり、それをそのまま反映した。

B 別の体系として既にわが国に存在していた「呉音」の混入である。

Aは、『日本書紀』α群の漢字に、全濁声母字を濁音仮名とする例が僅かながら残ることを見れば、これに続く所謂日本漢音にも中国原音を反映した全濁声母字の有声音が残存していた可能性があり、一概に否定できないものと思われる。⁽⁵⁾

Bの考えは、日本漢字音において、全濁字は呉音で濁・漢音で清(例えば、字―ジ(呉)・シ(漢))、という規範が一般に存する中で、漠然と採られてきたもののようである。

そこで、まずこのどちらの理由で日本漢音資料中に濁音形が見られるのかを明らかにしておく必要がある。

ここで再度、前掲の濁声点加点例に目を戻すと、それらの例の多くが仏典に見られることによって、B呉音形の混入したものである可能性の方が高そうであるが、何分にも用例数が少なく、右掲の例のみでは判断としない点が残る。

Ⅱ 鎌倉期以降

右の予想を確かめるために、用例を鎌倉期以降の資料に求めてみる。

得られた用例を、前節と同様の分類で掲げるが、例数が多くなるため、代表的な日本漢音資料であると言われる文献の例を、表にまとめて記すことにする。

(一) 漢籍

A 字音直読資料

『蒙求』 諸本《全濁字異なり字数 三三二》

① 長承本 一一三四年点 ④ 東洋文庫本 鎌倉中後期点 ⑤ 道順書写本 鎌倉後期点 ⑥ 康永本 一三四五年点 ⑦ 国会図書館本 『重新点校附音増註蒙求』 応永七年(一四〇〇)頃 朱点 ⑧ 国会図書館本 『附音増広古註蒙求』 大永五年(一二五五)点

音 擦 摩			声 母
匣	禪	邪	
○ 衡 ₉			①
○ 衡 ₉ ○ 畫 ₅₄₁ 玄 ₃₇₃		随 ₃₆	④
			⑤
○ 衡 ₉ ○ 畫 ₉		随 ₃₆	⑥
○ 檄 ₅₇ ○ 書 ₂₈ 含 ₁₄₁	○ 韶 ₂₂₄ ○ 十 ₁₄₆		⑦
○ 降 ₃₈ ○ 檄 ₅₇ 号 ₁₈₀ 豪 ₄₁₇ 何 ₆₁	拾 ₂₆₆ 城 ₂₂₅ 時 ₆₇ 樹 ₅₅₄ 劬 ₇₆	○ 辭 ₁₅₈ ○ 粟 ₉₀ ○ 尋 ₁₇₆	⑧

B 訓読資料

(。印は、撥音尾字に続く例。左傍線を引いた例は、仮名書き音形から吳音形と判断されるものである。以下同。)

計	音 裂 破			音 擦 破		
	群	澄	定	並	神	牀
5 (5)	。鵠 ^{カク} ₉₆ 。拒 ^カ ₃₉₈		。墮 ^ダ ₄₆₀	。鮑 ^{ボウ} ₁₉₂		
11 (11)				。簿 ^ホ ₁₆ 。僕 ^{ハク} ₁₄₇ 。毘 ^ヒ ₇₀ 。暴 ^ホ ₃₀₅	。鋤 ^{ショ} ₃₃₈	。慈 ^ジ ₃₄₂
0						
5 (5)	。劇 ^{ゲキ} ₂₇			。僕 ^{ハク} ₁₄₇		
15 (16)	。群 ^{グン} ₂₁₂	。杖 ^{ソウ} ₂₀₁ 。湛 ^{タン} ₄₄	。自 ^ジ ₁₇₄ 。導 ^{ドウ} ₈ 。檀 ^{タン} ₉₅	。毘 ^ヒ ₇₀		。字 ^ジ ₂₂₂ 。聚 ^{シュ} ₁₉₄ 。絶 ^{セツ} ₁₁₈ 156
37 (45)	。岐 ^ギ ₃₄ 。鯨 ^{ケイ} ₅₇₁	。杖 ^{ソウ} ₂₀₁ 416	。断 ^{ダン} ₄₁₀ 。墮 ^ダ ₄₂₈ 。田 ^{テン} ₂₀ 。檀 ^{タン} ₁₆₃ 。壇 ^{タン} ₅₁₈ 。題 ^{タイ} ₁₇₅ 。第 ^{ダイ} ₃₈₈	。毘 ^ヒ ₇₀ 。簿 ^ボ ₁₆ 。備 ^ビ ₄₈₆ 。勃 ^{ボツ} ₃₁₁	。術 ^{ジュツ} ₅₈₇ 。澀 ^{ジツ} ₅₆₆	。士 ^ジ ₂₂ 50 。慈 ^ジ ₃₄₂

- ②『白氏文集』卷三・四天永四年(一一一三)点 ⑩高山寺本『論語』卷七・八鎌倉初期点 ⑪高山寺本『史記』股本紀建曆元年(一二二二)点 ⑫金沢文庫本『群書治要』經部建長五年(一二五三)く正嘉元年(一二五七)点 ⑬『白氏文集』卷四正応二年(一二八九)点 ⑭『文選』正安二年(一二〇二)点 ⑮『白氏文集』卷三承平七年(一二三二)点

(二) 仏典

A 字音直読資料

(7) 『仏母大孔雀明王經』諸本《全濁字異なり字数 二四五》(梵語音写字・陀羅尼字は除く。)

① 仁和寺藏建久八年(一一九七)頃点 ① 東京大学国語研究室藏鎌倉中期点 ⑤ 竜門文庫藏延慶二年(一一三〇)九

点 ① 国会図書館藏元応二年(一一三〇)二点 ⑥ 東寺藏鎌倉末期朱点(第一四函1号)

計	音 裂 破			音 擦 破		音 擦 摩				声 母
	澄	定	並	牀	從	匣	禪	邪	奉	
1 (1)		堂 [○] _{三六九}								②
0										⑩
2 (2)	持 [○] _{二四}			護 [○] _{二二一}						⑪
5 (7)			暴 [○] _{九三六二}			翻 [○] _{八四七六} 鵠 [○] _{八三三九}			乏 [○] _{八六四} 分 [○] _{二三五} 五 [○] _{二四九} 八 [○] _{二七七}	⑫
4 (6)			白 [○] _{一八七}			瑚 [○] _{八三}	十 [○] _{二二七}	隋 [○] _{二八三} 二八三 三五九		⑬
5 (5)		濁 [○] _{四〇五} 第 [○] _{五六}				簧 [○] _六 絃 [○] _{三三二}		随 [○] _{五二〇}		⑭
7 (11)	陳 [○] _{三二}	濁 [○] _{一二〇} 陀 [○] _{三三〇} 第 [○] _{二九〇} 二九一 二九二 二九二			罪 [○] _{四九}	河 [○] _{三六五}	十 [○] _{二二} 三六			⑮

擦 破		音 擦 摩				声 母
神	從	匣	禪	邪	奉	
舌 ^シ 上 ⁷⁰ 舌 ^シ 中 ²⁴⁵	術 ^シ 上 ¹⁶ 術 ^シ 中 ⁵¹⁰ 術 ^シ 下 ²⁵³	何 ^シ 下 ³⁴⁰ 慮 ^シ 上 ⁷² 何 ^シ 上 ⁴⁶		巡 ^シ 下 ²¹⁷	服 ^シ 上 ⁴⁴⁶ 縛 ^シ 上 ¹⁷⁷ 縛 ^シ 上 ¹⁷⁸	① 罰 ^シ 上 ²⁴³ 罰 ^シ 上 ²⁴³ 罰 ^シ 下 ³³⁰
舌 ^シ 中 ²⁴⁵ 舌 ^シ 中 ⁵²⁵	術 ^シ 下 ²⁵³ 術 ^シ 中 ³⁰⁵ 舌 ^シ 上 ⁷⁰	何 ^シ 上 ⁴⁶ 慮 ^シ 上 ⁷² 慮 ^シ 中 ¹⁵⁵	時 ^シ 下 ³⁶⁶ 常 ^シ 中 ¹⁰⁸	邪 ^シ 上 ⁶⁸ 邪 ^シ 中 ⁵²² 邪 ^シ 下 ³²⁰	復 ^シ 上 ¹³⁵ 復 ^シ 上 ¹³⁷ 復 ^シ 上 ¹³¹ 復 ^シ 中 ²⁷² 復 ^シ 下 ⁵²¹ 復 ^シ 下 ³	① 罰 ^シ 下 ³³⁰ 罰 ^シ 下 ³³¹
実 ^シ 下 ³⁴⁷	術 ^シ 上 ¹⁶ 術 ^シ 中 ⁵¹⁰ 術 ^シ 下 ²⁵³	何 ^シ 下 ³⁴⁰ 華 ^シ 中 ⁹⁷ 華 ^シ 下 ⁵⁷¹		巡 ^シ 下 ²¹⁷ 邪 ^シ 中 ²⁵⁰ 邪 ^シ 下 ⁵²²	縛 ^シ 上 ¹⁷⁷ 縛 ^シ 上 ¹⁷⁸	① 罰 ^シ 上 ²⁴³ 罰 ^シ 上 ²⁴³
舌 ^シ 上 ⁷⁰	術 ^シ 上 ¹⁶ 術 ^シ 中 ⁵¹⁰ 術 ^シ 下 ²⁵³	慮 ^シ 中 ¹⁵⁵ 降 ^シ 中 ⁵⁷⁹	十 ^シ 中 ³³⁹	邪 ^シ 上 ⁶⁸ 邪 ^シ 中 ²⁵⁰ 邪 ^シ 下 ⁵²²	復 ^シ 中 ²⁴⁹ 復 ^シ 中 ²⁷² 復 ^シ 中 ⁵²¹ 復 ^シ 上 ²⁴² 復 ^シ 上 ⁶⁷	① 罰 ^シ 下 ³³⁰ 罰 ^シ 下 ³³¹
舌 ^シ 上 ⁷⁰ 実 ^シ 下 ³⁴⁷	術 ^シ 上 ¹⁶ 術 ^シ 中 ⁵¹⁰ 術 ^シ 下 ²⁵³	華 ^シ 中 ⁵⁷¹ 慮 ^シ 上 ⁷² 慮 ^シ 中 ¹⁵⁵ 華 ^シ 中 ⁹⁷	七 ^シ 中 ³³⁹ 善 ^シ 中 ⁷⁶ 善 ^シ 下 ⁸²	巡 ^シ 下 ²¹⁷ 邪 ^シ 上 ⁶⁸	縛 ^シ 上 ¹⁷⁷ 縛 ^シ 上 ¹⁷⁸ 縛 ^シ 上 ¹⁷⁹	① 罰 ^シ 上 ²⁴³ 罰 ^シ 上 ²⁴³ 罰 ^シ 下 ³³⁰ 罰 ^シ 下 ³³¹

計	音 裂 破				音
	群	澄	定	並	
16 (39)		杖 ^{チヤウ} 上 ^上 249		鼻 ^〇 中 ^〇 524 鼻 ^〇 下 ^〇 315 房 ^〇 下 ^〇 208 備 ^〇 下 ^〇 253 鼻 ^〇 上 ^〇 69 鼻 ^〇 中 ^〇 245	舌 ^〇 中 ^〇 525 実 ^〇 下 ^〇 348 実 ^〇 下 ^〇 349 実 ^〇 下 ^〇 93 実 ^〇 下 ^〇 347 実 ^〇 上 ^〇 368
17 (49)			噉 ^{タム} 中 ^中 295	鼻 ^〇 下 ^〇 315 鼻 ^〇 上 ^〇 69 鼻 ^〇 中 ^〇 245 鼻 ^〇 下 ^〇 253 鼻 ^〇 上 ^〇 69 鼻 ^〇 中 ^〇 245 鼻 ^〇 下 ^〇 524	舌 ^〇 下 ^〇 315 実 ^〇 下 ^〇 93 実 ^〇 下 ^〇 347
19 (38)	極 ^{キョク} 上 ^上 43		噉 ^{タム} 中 ^中 295	便 ^〇 中 ^〇 230 便 ^〇 下 ^〇 169 鼻 ^〇 上 ^〇 69 鼻 ^〇 中 ^〇 245 鼻 ^〇 下 ^〇 253 鼻 ^〇 上 ^〇 69 鼻 ^〇 中 ^〇 245 鼻 ^〇 下 ^〇 524	
13 (39)			噉 ^{タム} 中 ^中 295	便 ^〇 下 ^〇 329 便 ^〇 下 ^〇 169 鼻 ^〇 上 ^〇 69 鼻 ^〇 中 ^〇 245 鼻 ^〇 下 ^〇 524 鼻 ^〇 上 ^〇 69 鼻 ^〇 中 ^〇 245 鼻 ^〇 下 ^〇 315	舌 ^〇 中 ^〇 245 実 ^〇 下 ^〇 347 実 ^〇 下 ^〇 348 舌 ^〇 下 ^〇 315
23 (63)		除 ^〇 中 ^〇 509 持 ^〇 上 ^〇 49 除 ^〇 上 ^〇 18 除 ^〇 上 ^〇 147		便 ^〇 下 ^〇 329 便 ^〇 上 ^〇 279 便 ^〇 中 ^〇 230 備 ^〇 下 ^〇 253 鼻 ^〇 上 ^〇 69 鼻 ^〇 下 ^〇 315	示 ^〇 下 ^〇 224

B 訓読資料

◎高山寺蔵『惠果和上之碑文』平安後期点 ①東大寺図書館蔵『新修往生伝』卷下保元三年(一一五八)点 ②高山寺蔵『文鏡秘府論』天卷 鎌倉初期墨点(五七函6号)(月本雅幸「高山寺蔵文鏡秘府論の訓点」訳文・天卷)、「訓点語と訓点資料」第八十二輯による) ④京都女子大学蔵『表白集』鎌倉中期点 ⑤六地藏寺蔵『遍照發揮性靈集』鎌倉末期～南北朝期点(ただし、調査は卷一～卷五の漢音の合符が加点された例に限る)

音 擦 摩			声 母
匣	禪	奉	
			ㄘ
鎗 ^{シウ} 10オ			ㄏ
行 ^{シウ} 13ウ 夏 ^カ 62オ	尚 ^{シウ} 18ウ		ㄆ
河 ^カ 10オ 霞 ^カ 10オ 下 ^カ 15ウ	順 ^{シウ} 3オ 侍 ^{シウ} 16ウ	凡 ^{シウ} 17オ 六 ^{シウ} 4オ	ㄑ
学 ^{シウ} 439	甚 ^{シウ} 33 誠 ^{シウ} 103 誠 ^{シウ} 178	房 ^{シウ} 1250	ㄒ

計	音 裂 破			音 擦 破	
	澄	定	並	神	牀
5 (11)	除 ^{シウ} 209	墮 ^{シウ} 65	別 ^{シウ} 50 別 ^{シウ} 50	実 ^{シウ} 1 実 ^{シウ} 109 171 実 ^{シウ} 175	
9 (12)	除 ^{シウ} 177 除 ^{シウ} 182	墮 ^{シウ} 62 読 ^{シウ} 61	別 ^{シウ} 49 別 ^{シウ} 49 便 ^{シウ} 181	実 ^{シウ} 149 152	事 ^{シウ} 7

三、全濁声母字濁音形の由来

右に一覧した全濁字に対する濁声点加例から知られる点を以下にまとめてみる。

(1) 初期の濁声点加例資料（平安後期・院政期の資料）における、全濁声母字濁音形の出現状況は、特定の声母に偏らなかったが、その事情は時代を降ってみても変わらない。

(2) 時代が降ると共に、濁音形が増えていく傾向にある。

(3) 濁音形は、仏典に比較的多く、漢籍に少ない。

(4) この傾向のもとで、漢籍の『蒙求』では、僧侶の加点にかかると思われる①長承本・④東洋文庫本に比較的多

計	音 裂 破			音擦破	
	群	定	並	牀	從
2 (2)		誕 ^{タシ} 7			寂 ^{シヤク} 53
2 (2)		誕 ^{タシ} 19ウ			
4 (4)					藏 ^{サウ} 59ウ
13 (16)	群一 ^ケ 2ウ	童 ^{ドウ} 六13ウ 土 ^ツ 一10ウ 六3ウ 土 ^ツ 四6ウ	白 ^{ハク} 六1ウ		
14 (17)	慙 ^{サン} 五54	代 ^{ダイ} 四62 度 ^ト 四177 塵 ^{ジン} 一104 道 ^{ドウ} 一131 毒 ^{ドク} 五89	駝 ^タ 二209 暴 ^{ボウ} 三63	事 ^シ 一184	泉 ^{セン} 一48 63 200

くの濁音形が見られる。

この結果は、先の両可能性

A 日本漢音の母胎音が、全濁声母字の無声化を完了させていないものであり、それをそのまま反映した。

B 別の体系として既にわが国に存在していた「呉音」の混入である。

の、B 説を支持するようである。特に、(1)・(2)の点は重要である。なぜならば、中国原音における全濁音の無声化の実態が、次のように捉えられているからである。⁽⁸⁾

(1) 全濁音の無声化は隋末唐初期(7世紀)から見られ、唐代を通じて進行する。

(2) 摩擦音→破擦音→破裂音の順で進行する(定母が最も遅れる)。

(3) 唐代(六一八〜九〇七年)末に至っても完全には完了しない。

中国での全濁音の無声化は、破裂音(並・定・澄・群母)が最も遅れた事が判明している。よって、わが国の漢音資料の全濁声母字への濁声点加用例が、中国原音の実態を反映しているならば、並母・定母・澄母・群母に、より多くの例がみられるはずである。しかし、実際には得られた用例の当該字の声母は様々であり、特定の偏りは見られなかった。したがって、中国原音の状態をそのままに反映したというA説は、否定されるのである。また、A説では、中国側で全濁声母字の無声化が進行する中でわが国では逆に全濁声母字の濁音形が増え続ける現象と、漢籍よりも仏典に濁音形が多いという事実を説明できないものと思われる。

以上によって、これまで掲げてきた全濁字の濁音形は、漢音の母胎となった中国音のものを引き継いだのではなく、呉音形の影響によってわが国で生じたものであることが明らかとなった。

四、全濁声母字濁声点加點例の声調

ここでは、濁声点が担っていた、濁音表示以外のもう一つの機能である声調表示の点に焦点をしばってみたい。すなわち、呉音の影響による濁音形をとっていた漢字の声調は、はたして漢音声調の儘であったのか、それとも、声調もやはり呉音声調に変わっていたのかという点について調査してみようと思うのである。

この問題の解明にあたっては、各漢字の漢音声調・呉音声調を明らかにする必要がある。しかし、当該字のわが国での漢音声調・呉音声調を、何の限定もなしに特定することはできそうにない。また、漢音声調と呉音声調とが等しい漢字も少なくない。そこで、ここでは、右の全濁声母字に加えられた濁声点が示す声調を『広韻』の声調と比較し、そこで相違の見られたものについて検討を加えるという方法をとることにしたい。

『広韻』声調との比較の結果、その声調と一致しない例を持つ漢字は、次のごとくである。⁽⁹⁾

- 1 『広韻』平声であるが上声点が加點された漢字
- ⑧ 城、① 時慈、㊦ 房、㊧ 邪持除、④ 田童、㊩ 塵（いずれも呉音資料では、去声または上声である漢字）
- 2 『広韻』平声であるが去声点が加點された漢字
- ① 何、⑨ 凡群（いずれも呉音資料では、去声または上声である漢字）
- 3 『広韻』上声であるが平声点が加點された漢字
- ① 聚杖、㊠ 墮、④ 土下（呉音資料では、「杖」のみ去声・上声。他は、いずれも平声の漢字）
- 4 『広韻』去声であるが平声点が加點された漢字

㉑字、㉒暴、㉓㉔㉕復、㉖患目、㉗侍地、㉘事代度（呉音資料では、「代」のみ去声・上声。¹⁰）他は、いずれも平声の漢字）

5 『広韻』去声であるが上声点が加えられた漢字

㉙署、㉚畫、㉛㉜備、㉝鼻、㉞自、㉟字（呉音資料では、「署」は去声。他は、いずれも平声の漢字）

右の、『広韻』声調と異なるところの声調は、5の場合を除き、大部分が呉音資料から知られる声調と一致するものである。¹¹さらにその内訳を資料毎にみると、次の二点が判明する。

(1) 呉音声調と一致する例を持つ資料は、仏典（アルファベットの文献記号）に多い。

(2) 呉音声調と一致する例は、時代が降ると共に増加する。（鎌倉時代以降へ㉑・㉒の資料が多い。）

すなわち、比較的早い時期の資料や漢籍訓点資料では、呉音の影響を受けて濁音形は採るものの、その声調は、漢音声調の儘の例が多いが、仏典や、漢籍でも時代の降った資料では、声調までも呉音声調となる例の割合が高くなると言えるのである。

五、全濁声母字濁声点加字の仮名書き音形

ここで、視点を移し、これまで問題としてきた濁声点加字例の、各字の日本漢字音における仮名書き音形について調べてみる。すると、漢音形と呉音形とが清濁のみの相違であり、仮名書き音形では等しい漢字が大部分であることに気づかれる。漢音と呉音とが、仮名書き音形で異なる漢字は、次の九字に過ぎない。

行・城・華・下・誠・勲・患・夏・凡

したがって、呉音と仮名書き音形は同形であつて、清濁のみの相違の漢字について特に、早くから呉音と同じく濁音で唱えられることがあつたことになる。⁽¹²⁾

右に記した「行」以下の例は、実際の資料中の仮名書き音形も呉音形であり漢音の全濁声母字の濁音形の例からは除外されるべきものと、連濁によつて濁音になった可能性の存するものである。⁽¹³⁾

漢音と吳音とで仮名書き音形が同一であり、漢音―清・吳音―濁の漢字が、多く吳音の濁音で唱えられるということの事実は、室町時代以降の資料については、既に指摘されている。

①『文明本節用集』文明六年（一四七四）頃写

漢音形として朱書きされた音の中に、吳音形と清濁の相違だけの全濁音字に、濁点を付した例がみられる。そして、本資料に名高い「不濁点」⁽¹⁴⁾は、漢音でも濁音で読まれがちな全濁声母字に対して、その漢音は清音であることを敢えて示した符号である。

②珠光編『浄土三部経音義』天正十八年（一五九〇）刊

原則として、漢音と吳音との両音形を掲げる音義であるが、次の全濁音字には濁音形しか記さない。珠光にとつては、本来漢音である清音形は、記す必要のない音となつていたものと思われる。⁽¹⁵⁾

奉母	鼻 ^ビ	145	3	備 ^ビ	9	6
邪母	隨 ^{ズイ}	98	4	辭 ^ジ	155	3
禪母	瑞 ^{ズイ}	51	1	侍 ^シ	10	1
匣母	互 ^ゴ	136	2	護 ^ゴ	17	6
從母	自 ^ジ	140	2	慈 ^ジ	67	6
奉母	便 ^{ベン}	10	6	父 ^フ	140	5
邪母	徐 ^{ジョ}	90	6	仕 ^シ	13	6
禪母	徂 ^ソ	43	4	順 ^{ジュン}	124	5
匣母	害 ^{ガイ}	73	7	學 ^{ガク}	89	4
從母	亥 ^{ゲイ}	159	1	坐 ^ザ	25	3
奉母	仏 ^{ブツ}	9	3	(以下八字略)		
邪母	罰 ^{パチ}	112	6	(以下四字略)		
禪母	巡 ^{ジュン}	98	3	(以下三字略)		
匣母	尋 ^{ジン}	95	4			
從母	伐 ^{バツ}	12	1			
奉母	縛 ^{バク}	45	3			
邪母	熟 ^{ジュク}	24	2			
禪母	十 ^{ジュウ}	137	1			
匣母	玄 ^{ゲン}	133	3			
從母	在 ^{ザイ}	25	1			
奉母	幻 ^{ゲン}	141	5			
邪母	上 ^{ジャウ}	131	5			
禪母	豪 ^{コウ}	141	3			
匣母	量 ^{リヤウ}	141	3			
從母	蒙 ^{モウ}	133	5			
奉母	甚 ^{ジン}	146	6			
邪母	善 ^{ゼン}	53	6			
禪母	号 ^{ゴウ}	54	7			
匣母	甘 ^{カン}	55	2			
從母	全 ^{ゼン}	139	1			
奉母	乏 ^{ボフ・ボク}	156	4			

濁音形が見られるのかについては明らかでなかった。

今回の考察によって、それらは、呉音形の影響によるものであると考えられた。したがって、全濁声母字は、日本漢音ではいわゆる清音であったと考えてよい。

(2) 呉音形の影響によって加えられた濁声点の声調は、比較的早い時期の資料や漢籍訓点資料では、漢音声調の儘の例が多いが、仏典や、漢籍でも時代の降った資料では、呉音声調となる割合が高くなる。

(3) 仮名書き音形が漢音と呉音とで異なる漢字に着目して、呉音↓漢音への移り変わりを説く論が先学によってなされている。⁽¹⁶⁾

しかし、一方、「全濁声母字は、漢音―清・呉音―濁」という規範が存する中で、室町時代以降規範に反して、漢音を記したと思われる箇所に、《仮名書き音形が漢音と呉音とで同一の漢字については、呉音の濁音優勢》の実態を示す資料があることも報告されていた。この度の考察によって、日本漢音の頭音を清と濁とで捉え始めた時期（平安後期）に、既にこの傾向が見られることが判明した。

松井利彦氏は、前掲の論文中で、甲種の漢字―漢音と呉音が清濁のみで違う漢字・乙種の漢字―漢音と呉音が清濁以外でも異形である漢字と規定して、以下の見通しを述べておられる。

中世末期から現代に至るまでの字音の交替は、大きく分けると、呉音が漢音と交替する、漢音が呉音と交替するという二つの方向において見られる。そして、前者は乙類の漢字（行、人、性、静、男など）に多く見られ、後者は甲種の漢字（合、群、造、上、談など）に多く見られる。

この指摘は、具体例を示してなされたものではないが、大きな流れとしては、漢音と呉音との交流が著しくなる院政・鎌倉時代にまでさかのぼらせて言えるものと思われる。⁽¹⁷⁾

今後の課題として、一々の漢字についての漢音・呉音の勢力変化の実態と、その原因究明とが残されている。⁽¹⁸⁾

注

- (1) 築島裕「濁点の起源」(『東京大学教養学部人文科学科紀要』第三二輯五号)参照。
- (2) 現在複製本で知ることができるものの内、比較的純粋な日本漢音資料であるとされている文献から得られた例である。(内は、用例の所在を示す。
- (3) 小林芳規先生からお借りした抜き書き移点本による。
- (4) 鈴木恵氏から拝借した移点本による。
- (5) 森博達「《日本書紀》歌謡における万葉仮名の一特質―漢字原音より観た書紀区分論―」(『文学』四五―二)参照。
- (6) 岡本勲氏・高松政雄氏は、この考えに立つ様である。岡本勲「日本漢音に於ける頭子音の清濁(下)―韻鏡清の字にして日本字音濁となるものに就て―」(『国語国文』三八―一)、同「注音本『開蒙要訓』と日本漢字音―清濁のゆれをめぐって―」(『訓点語と訓点資料』第七十八輯)、高松政雄「『正音』の清濁―名義抄の性格の一面―」(『国語国文』四六―一二)。しかし、いずれも初期の日本漢音資料の例が不足しており、説得力を欠く。
- (7) 沼本克明「高山寺藏理趣経鎌倉期点解説並びに影印」(『鎌倉時代語研究』第六輯)、同「高山寺藏『般若理趣経』―分韻表―」(『昭和六十三年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集』平成元年三月)、による。
- (8) 水谷真成「唐代に於ける中国語語頭鼻音 Denasalization の進行過程」(『東洋学報』三九―四)、森博達「《日本書紀》歌謡における万葉仮名の一特質―漢字原音より観た書紀区分論―」(『文学』四五―二)、高松政雄「日本漢字音概論」一九〇・一九一頁、など。
- (9) 『広韻』上声字に去声点が付された例は、中国側の声調変化である上声全濁字の去声化の反映と考えられるため省略した。g・③④などは、前掲の文献記号である。
- (10) 「代」は、呉音声調とも一致しない。『広韻』声調と日本漢字音の声調とのずれが現れた例と考えられる。
- (11) ここで呉音の声調を知るために用いた資料は、『承暦本金光明最勝王経音義』、『法華経单字』、『法華経音訓』、妙一記念館蔵

『仮名書き法華経』、国会図書館蔵『妙法蓮華経』、安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多経』、『大般若経音義』諸本（築島裕『大般若経音義の研究 本文篇』に依る）、東大寺図書館蔵『中論偈頌』である。5の諸字は、日本漢音では一音節字であり、そのための上声化と考えられる。佐々木勇『日本漢音に於ける声調変化―岩崎文庫本『蒙求』を中心に―』（『新大國語』第一四号）参照。

(12) 念のために記せば、全濁声母字の濁音化例が、もし中国原音の反映であれば、わが国の呉音の仮名書き音形との関係によるこのような差異は生じないはずである。

(13) 今回の調査では、連濁の可能性のある例も一様に扱ってきた。漢音資料に於て、撥音尾字の直後の漢字に等しく連濁の可能性があるならば、呉音と仮名書き音形の異なる字も更に多く出現するはずであるが、その様な例は、僅かである。この点から、漢音の連濁発生にも、当該字の呉音形が深く関わっていることが知られるのである。

(14) 小松英雄『不濁点』（『国語学』第八〇集、昭四五―三）、中田祝夫『文明本節用集のために』（『文明本節用集研究並びに索引影印篇』所収、昭四五―七）、湯沢質幸『室町時代における清濁と呉音・漢音―文明本節用集を中心として』（『国語国文』四六―二）参照。

(15) 高松政雄『呉音・漢音―珠光「浄土三部経音義」より―』（『岐阜大学教育学部研究報告』一二）、同『漢音の清濁』（『国語国文』五六―九）参照。

(16) 沼本克明『変体漢文訓読に於ける字音語の性格』（『信州大学人文科学論集』第7号）、来田隆『否定辞「無」を冠する漢語の音と意味―「無礼」の音の変遷をめぐって』（『鎌倉時代語研究』第四輯）など。

(17) 漢音と呉音とで仮名書き音形が同形の場合、なぜ漢音の清ではなく、呉音の濁に流れたのかについては、未だ考えるところが無い。後考に俟ちたい。

(18) 本稿の考察は、全濁声母字に限ったものであったが、他の声母字にも原則に合わない例が存する。それら全体の中での検討も必要であろうと思われる。また、その漢字がどの様な語の中で使用されているのかを、その語義変化をも考慮にいれて考察を加える必要がある。